

歌舞伎座株式会社の設立

—その再検討と評価—

はじめに

本稿で考察するのは、明治二十九年四月八日創業総会を行った歌舞伎座株式会社である。これ以前の東京における大劇場の歌舞伎興行の経営変化について、筆者は別稿で明治十三年設立、十四年解散の新富座株式会社を中心に、すでにまとめた。

そこではまず、天保の改革以降、明治維新を経て十年代に至るまでの東京の歌舞伎興行は明治六年以降、法令によって公許の劇場数が多くなり、経営競争も激しくなつて、さらにたび重なる火災と政情不安により各座の負債が増加していたことを概観した。

そしてその上で、早稲田大学演劇博物館所蔵の明治十年設立の「新富座家屋組」証券、および十三年設立の「新富座株式会社」社則を検討した。そこから、

・新富座は明治八年から一株百円の有価証券を導入しており、それは十年の家屋組でも同じであること

・それは近世の、「株仲間」に加入して同業者組合に入り営業権を得るため購入する「株」とは違って、売買自由であるかわりに会社資本に責任を持つ一株百円の有価証券、近代以降西洋から移入された権利義務の概念にもとづく「株」と体裁は同じであること

・しかし十三年の新富座株式会社の社則を見るかぎり、新富座で再三設立された会社の実体は、座主守田勘弥とその債権者を取締役として、債権を出資された資本金として証券化し、分割して、利益があれば配当という形でじよに返済を行うことが目的であったこと

・そして明治十三年の場合、一年後には債権者により破綻したこと

を明らかにした。

以上を明治初期までの東京の歌舞伎興行の概観、および明治初期における代表的な大劇場での株式会社方式導入とその破綻の例とする。そして本稿ではその例をふまえた上で、明治二十二年十一月初興行以降東京最大の劇場であった歌舞伎座が、二十

九年に設立した株式会社について考察したい。

会社設立までの明治二十八年中のことは伊原敏郎『明治演劇史』⁽²⁾四百七十六頁以下がもつとも簡潔にまとめている。また、劇場の興行ごとの演目と共に周辺事項を記す形で、実際に関与した田村成義の口述筆記「歌舞伎座今昔物語」⁽³⁾（以下「今昔物語」と、その編著『続歌舞伎年代記』⁽⁴⁾（以下「年代記」）、それより一世代下の木村錦花による『近世劇壇史 歌舞伎座編』⁽⁵⁾（以下「劇壇史」）がある。以後の歌舞伎座株式会社についての記述は、これらの資料を引用することになされてきた。

しかしまず、会社設立の具体的な過程について木村と田村の著作を比較すると、整合しない記述がある。結論から言うと『劇壇史』のほうが、先行する田村の「今昔物語」を資料として用いながら、新聞記事や番付など他の資料も参照してまとめている。比較的正確である。しかしそれでも誤った箇所、ことからの起きた時期やその意味のはっきりしない箇所がある。

これらの整合をはかりつつ、新聞記事や公文書などの同時資料を用いて会社設立過程を再検討すると、歌舞伎座株式会社は従来歌舞伎興行と関係の薄かった実業家・資産家を主として取締役会を形成し、会社外にも株主を募集して一応の収益を上げ、長期に継続していることがわかってきた。そしてこの会社が設立されたことが歌舞伎興行史上どのような意味を持つか考察した論考は、調査した限り現在までないようである。

本稿の目的は、木村と田村の記述を整理した上で公文書類・新聞で再検討し、会社設立はどのような目的でどのような人々が行ったのか、そして歌舞伎座株式会社は歌舞伎興行史上どのような位置に置いて評価すべきなのか、従来よりも正確に把握することである。

一 「劇壇史」と田村の記述の比較

まず比較的正確な『劇壇史』の記述を要約する。そして、それと田村の記述を比べた相違点を挙げる。『劇壇史』の項目は、基本的には歌舞伎座の興行毎で区切られて

寺 田 詩 麻

いる。月日はその区切りを示す。括弧で囲った部分は発生した日が明記されないことがらである。

(明治二十八年十二月二十五日以前)

千葉勝五郎は興行をやめる決心をし、劇場の買い取りについて田村成義に相談。田村は株式に分割して売することを提案。価格は地所なしで五万円、地所付きで十万円、田村へ成功報酬四千円の条件。後藤象二郎伯爵夫人の弟井上竹次郎と会い、さらに後藤に三宅豹三を推薦される。田村は福地桜痴と、東京電灯会社支配人で渋沢栄一子爵の妹婿の皆川四郎を加える。

十二月二十五日

三十間堀の大村家で第一回契約。千葉に一万円の手付け。

劇場は五万円、地所は坪二十五円、二千坪。地所は会社成立次第買い取る約束。

二、三日後、田村宅に「歌舞伎座株式会社創立事務所」の看板を掲げる。

明治二十九年一月二十三日

歌舞伎座初日。「増補桃山譚」「富岡恋山開」和洋合奏の「道成寺」。

二十五日間、さらに四日の日延べ。

井上、皆川、三宅、福地、田村の協議により、皆川、井上が五万円出して一時会社を買い、七万円で会社売り、利益の二万円を関係者で分配することに決定。

千葉はその分配と会社創立委員に名を加えるよう要請。

四月八日

創立総会。①歌舞伎座買入れ契約・座主権譲受契約 ②創業費の認否 ③定款確定

④重役給料・報酬 ⑤重役選挙を議題とする。

重役は皆川四郎、井上竹次郎、千葉仁之助、西川忠亮、野田丈次郎。

監査役に馬越恭平、早川松之助、坂本省三。田村は幹事となる。

互選で会長皆川、副会長井上に決定。

定款通り年六回の興行をするためには守田勘弥を顧問にと団十郎が井上に勧め、井上は守田を加える。田村は会社が成立していないと反発し、四月興行延期を忠告。井上と皆川の対立が深まる。

四月三十日

歌舞伎座初日。「富貴草平家物語」「助六由縁江戸桜」「箱書付魚屋茶碗」。

守田は菊五郎の招聘に成功。三十三日間の大入。

守田と福地に全権を握られる危機を感じた田村は皆川に、七月・八月の興行を中止すべきだと諫言、皆川は承諾する。

守田と福地は、井上の出資一萬円で七月興行を企画。

七月十二日

歌舞伎座初日。「形見草四谷怪談」「三千両重荷若駒」「恋文月誤縁遠近」。不入のため二十二日間で閉場。

「時事新報」に連日内情暴露記事が掲載される。

定款にある、興行を年六回行うとの条項にこだわらず、もっと少なく興行を行う方がよいと考える皆川と、定款通りにすれば利益が上がると考える井上との疎隔。

井上が後藤伯に、田村は「会社を惑乱させる者である」と告げる。伯は九代目市川團十郎を呼び、田村が重役を扇動しているかと聞く。団十郎は否定しない。五代目尾上菊五郎も田村の退職に賛成。

井上は皆川に田村の退職をもちかけるが、皆川は拒否。

九月一日

歌舞伎座株式会社、株式取引の定期売買に上場。

十月四日

株式総会。出席者が定数に満たず仮決議。

五月から九月の営業報告、利益配当は一株あたり七十五銭(年一割六分弱)。

定款十二条と三十七条の改正、副社長一名を置くことができると定める。

十月五日

重役会議。会長を社長と改める。副社長を井上とする。開業式を十一月一日と発表。

臨時総会で西川、千葉が取締役辞任。吉川安之助、伊藤謙吉が取締役に加わる。

十一月十日・十一日

歌舞伎座株式会社開業式。引き続き会社第一回興行。中位の入で二十五日間。

「二人景清」「奥州安達原」「浪底親睦会」。

十一月二十二日・二十三日

重役伊藤謙吉より書状三通。最後の書状は書留。会社が第三銀行へ預けている五万円を皆川が不正に引き出して仕込み金にしたとの疑惑。銀行からの借入金であると説明して解決する。

十二月一日

疑惑を受けて立腹した皆川は三十日辞任。井上は沈黙。

伊藤が社長となり、井上が興行専務、吉川が会計、野田が庶務となる。

〔田村は大阪へ行き、浪花座の秋山儀四郎と道頓堀演劇会社を起こす。〕

以上が、『劇壇史』による歌舞伎座株式会社の企画から皆川社長辞任までの概略である。

第二に、田村の「今昔物語」において、『劇壇史』と比較して『劇壇史』の資料の

一つであるので基本的な相違はないが、『劇壇史』に書かれていない点を述べる。

・井上とは、井上の番頭の木村松次郎を通じて会談した。

・福地を招き入れたのは田村。

・明治二十八年十二月二十五日の契約後、「直に」銀座三丁目十五番地の田村宅へ、福地筆の看板を掲げる。

・明治二十九年一月興行は田村の案、四月から勘弥を奥役として入れる。仕込金は井上と皆川が「会社とも個人ともつかず立替へ」る。

・四月興行の純益二万円。これにより会社の払い込みも千葉への支払いも済んだ。

・皆川と田村の持っていた株は井上が東海銀行へ入れた。

第三に『年代記』において、『劇壇史』と相違する事項を箇条書きで述べる。年月日は事項の記載される項目（すべて歌舞伎座）を示す。これも細かい月日は曖昧である。

明治二十九年一月二十三日

・会社組織にしたのは井上・三宅・皆川・田村の四人。福地への言及なし。

・劇場の価格は五万五千元。

四月三十日

・四月興行は利益二万五千元、一万円を会社に寄付、一万五千元を千葉を加えた五人で分配。守田への言及なし。

七月十二日

・「本月八日」創業総会。内容は『劇壇史』四月八日の項に記される総会と同様。

三点の資料を対照して、判明した問題を挙げる。

まず、劇場の価格がまちまちであったり、『年代記』が創業総会を七月の項に入れている。そして、会社の資本金を作るために貢献をしたとされる福地桜痴の歌舞伎座への関与を『劇壇史』『今昔物語』は会社設立時からとする一方、『年代記』は会社への福地と守田の関与を全く記していない。

さらに、歌舞伎座株式会社に関係したとして名前の挙げられている人々はどのような人物であったのか、この会社によってそれまで何が変わったのか、どのような効果が期待されたのか、これらの資料だけではあまりよく分からない。これは伊原の『明治演劇史』を加えても同様である。

これらの問題を明らかにするためには、新聞や会社関係の公文書類をもちいた会社設立過程の再検討が必要であると考える。

二 再検討—会社の成立まで

まず、歌舞伎座株式会社の設立前後の事情をつかむために、歌舞伎座とそれを取り巻く環境がどのような状態であったか整理しておく。

明治二十八年は、東京の歌舞伎興行が変化の変わり目にあることをあらわすことがらいくつかに起きている。四月には従来続いていた大小劇場に出勤する俳優の区別がなくなり、鑑札が統一されて全俳優を新たに階級分けした東京俳優組合が結成された。十月二十九日には、江戸三座のうちの中村座座元であった十三代目中村勘三郎が、火災に遭った座の再築ができなまま窮死する。十二月には同じく三座の末流である新富座で家屋と座主権の譲渡を巡る紛議が起き、結果的に三十年まで興行ができなかった事態になっている。

歌舞伎座には、五月に川上音二郎の一座がはじめて出勤した。五月は大入となり、七月も出勤する。しかし不入で、団十郎・菊五郎はその後に出ることに難色を示した。苦慮した千葉勝五郎は川上にさらなる出勤を勧めたとの報道もあるが、十一月興行に結局団十郎が出勤して「暫」を勤めた。ここまでの事情は『明治演劇史』と『歌舞伎新報』『都新聞』などの新聞記事を校合しても差異はない。

ところで『歌舞伎新報』（以下「新報」）に、八月から九月にかけて「鈴鹿山人」という人物が「浪花土産」と題し、大阪と東京の劇場を比較した経営法の考察を執筆している。この人物は五月二十四日に大阪の道頓堀五座を視察している。

「新報」一六二四号巻末の「社告」に、今後の掲載予定として「田村鈴鹿氏の浪花土産」という一文がある。田村成義は後年しばしば「鈴鹿將軍」とあだ名されており、五月頃に秋山儀四郎の招きにより大阪へ行ったことは『年代記』六百九十三頁にも記されている。そのため、この「浪花土産」は田村成義の執筆したものと考えられる。

この記事は大阪の芝居が常に興行利益を上げていた理由を六点挙げ、特にその中の二点は東京でも模倣することができると提言している。それはさらに五つに細分して分析されているが、その三番目と四番目が興味深いので、適宜要約しながら掲げる。原文に句読点がないため、適宜空白を補った。

「三番目」（大阪の興行人は小説を多く読んで世間の好みを知り、それに合わせる商売の秘訣を取り入れていると指摘する。一方東京では）

其興行を目論むに当つてや世間の事に通曉せざるの人々相会し 興行人は昔時に在つて大入を占たる狂言を追想し 俳優も亦仕勝手好きが上に骨の折れざる役を勤めんと競ひ 作者は既に出来て居るものを以て間に合はせんとするが故 到底客の眼を満足せしむる能はず（後略）

「四番目」（大阪の興行人は場代を定めるに、収入と利益を見込んだ上で適正な価格を

決めるが、東京では)

仕入を為すに当りて出入の予算といふ事を為さず 縦令は俳優に手付を渡すも別に狂言を定むるといふでもなく(略)総ての相談を了りたる後ならでは 其仕入金は何程を要するや更に判然せず 漸くにして初日前に至り勘定を為せば 仕入金是非常に高く普通の手段を以ては之を回復するの策なきにより 俄に彼も儉約是も儉約と称し 必要欠く可らざるの費用をも吝む(後略)

田村はここで、「世間の事に通曉」した人間の関与と、利益による採算を見込んで計画的に支払いを行う合理的な経営が、東京の興行人には必要だと指摘している。つまりこの資料により、このごろ田村はまだ抽象的ながら、劇場の経営に従来の興行関係者ではなしえない合理的な方法を導入したいと考えていたことがわかる。そしてそこにそれを具体化しうる千葉勝五郎からの歌舞伎座譲渡の申し入れがあつたと考え、会社設立の提案がなされた背景がよりはつきりする。

以上のような時代背景と劇場経営の模索という素地の上に、歌舞伎座株式会社は設立されたと見ることが出来る。その計画は皆川、田村、井上により十二月よりも「三四ヶ月前」から進められていたと報じられているが、そうであれば、少なくとも十一月興行の準備と平行して進められていたと考えられる。

それでは、歌舞伎座株式会社は正式にはいつ設立され、どのような構成の会社であつたのか。東京都公文書館には農商務省や東京府知事宛に提出された設立申請書、株式申込簿、起業時の仮定款、明治三十一年四月改正と記した定款などが保管されている。これらと新聞記事とによってその実際を見る。

「都新聞」(以下「都」)は、看板を掲げたのは明治二十九年二月一日、歌舞伎座の楼上であつたとする。同月三日付で「歌舞伎座株式会社起業目論見書謄本」(以下「謄本」)と「歌舞伎座株式会社仮定款」(以下「仮定款」)が農商務省に提出されている。以後二十九年・三十年に本定款が提出された形跡は、現在調査したかぎりない。

「仮定款」・「謄本」による会社資本の内訳は次の通りである。

資本金総額：五十万円 一万株に分割する(一株五十円)

資本金使用の内訳：建物器具一切 七万五千元

営業資本金 五万円

建物改築及び拡張費 三十七万五千元

「仮定款」は全四十三条から成り、第二条に会社の目的を「本会社ハ新古演劇ノ業ヲ営ミ其ノ観覧料ヲ以テ利益ヲ享受スルニ在リ」と定義する。以下の細則は、ほぼすべて株の取り扱いと取締役会の運営について定義したものである。これによって、具体的にこの会社における株の性質が判明する。主な内容は次の通りである。

・株券には十株券、五株券、一株券の三種があり、払込延滞には利息が課される。(第五条、十五条)

・金額完納までは仮株券を交付する。(第六条)

・株券には記名調印する。書き換えの際は手数料が必要である。譲渡の際には親族二名以上の保証人が必要である。(第七条、八条)

・株主の議決権は一株につき一個、四月と十月の通常総会のほか臨時総会を開くことも可能で、議決は総株金の四分の一に相当する株主の出席により多数決で決する。(第十八条、二十三条、二十七条)

・取締役五名、監査役三名。取締役は所有株五十株以上、監査役は三十株以上の株主から選挙。欠員の生じる場合は臨時総会を開くことが可能であるが、業務に支障のない場合は次の改選期を待つて選挙を行う。(第三十一条、三十二条、三十九条)

すなわち、この会社における「株」を得ることは会社運営の権利を得ることと同義である。出資者を明らかにする義務もある。これは前述した近世の「株」とは明らかに違う、権利義務の概念を証券という形にした近代以降の「株」によって会社が構成されることを示す。そして分割払い込みが可能な形で一株から、長期的に広く株金の募集を行い、それによって会社を維持しようとする姿勢をうかがうことができる。

そして「建物器具一切」すなわち劇場の公式価格は、書類上は七万五千元だったことが判明する。説によって内訳が分かれるが、ここに田村への手数料や千葉への礼金、各人への分配金が合計二万円ないし二万五千元含まれていると考えられる。

三月六日に座主権の譲渡が公証役場で行われる。千葉勝五郎に対する譲受人は井上竹次郎、千葉、皆川四郎、三宅約三の発起する歌舞伎座株式会社で、田村は皆川の代理人として出席している。また、井上・三宅の代理人として木村松次郎の名を見ることが出来る。

三月から四月にかけて、設立申請書が東京府知事・農商務省大臣宛にやりとりされる。総株数の誤記で認可が遅れたようであるが、一貫して発起人は井上、千葉、皆川、三宅の四人である。「第五号 歌舞伎座株式会社株式申込簿謄本」によれば、彼ら四人は三月十五日と二十一日に、それぞれ一株五十円の株を六百二十五株ずつ申し込んでいる。この合計十二万五千元は建物器具一切と営業資本金の合計に等しい。つまり彼らの出資が完済すれば、会社はいつでも興行が行える状態になることをアピールしているのだから。

田村は一貫して直接発起人ではない。しかし先に挙げた座主権譲渡の代理のほかに、四月十三日付「株式会社設立免許申請書」に三宅の代理として署名捺印している。福地の名は、「第七号 歌舞伎座株式会社株式申込簿謄本」にはじめて見ることがで

さる。これは一株単位の株主も記した二百余丁に及ぶ綴りであるが、田村と福地は三月二十三日にそれぞれ五十株ずつ株を申し込んでいた。福地は申込代理人に井上を立てている。ここからは、書類上田村は発起人代理、また株主として参加し、福地は名義上の株主としての参加であったことが判明する。守田勘弥の名は、どの書類にも記載されない。

「新報」一六三七号によれば、創業総会が開かれたのは四月八日である。この記事の内容は『劇壇史』と一致する。そのため『年代記』が同様の記事を七月とするのは誤りである。しかし「農商務省指令商第五三六一号」により、設立が正式に認可されて免許が降りたのは二十七日である。だから八日時点では非認可の会社である。千葉と株式会社との間で受け渡しがすべて終了したのは五月十七日であったとされるが、ここで完全に、新しい取締役に経営の実権が渡されたものと見る。だから四月三十日初日の歌舞伎座評に⁽¹⁵⁾

歌舞伎座の当興行を会社成立後初めての開場と見るべきか 将た旧座主千葉勝一 個人の興行と見るべきかは 局外者の我等が問ふも益なき処

とあるのは、劇場外部から見たこの微妙な状態をよくとらえている。株主から会社への第一回株金払込は、「仮定款」によれば、会社設立より一ヶ月以内を期限として一株あたり十二円五十銭と定められた。以後の株主による株金払込は、事業成績により七月から十年間以内に、通知により行うものとされた。この経過から見ても、四月三十日初日の興行は、会社として行うことはできず、「今昔物語」が記すように重役が私的な資金によって行ったものと推定することができる。

以上から、歌舞伎座株式会社は多くの人間の出資によって経営を維持し、演劇興行によって利益を上げること目標として、千葉、皆川、井上、三宅を直接発起人として二月から四月にかけて設立され、農商務省から免許を交付されたことが分かった。そして田村は発起人代理あるいは株主としてこの始終に関与し、福地は書類上は株主として三月から参加していることが確認できた。

三 発起人・取締役たちの出自

創業総会で取締役・監査役となった、すなわち取締役会の人々は、「新報」一六三七号に掲載された一覧と『劇壇史』が一致する。発起人も合わせ、ここで彼らの履歴を、判明するかぎり見ることにする。

まず歌舞伎座創業者の千葉勝五郎であるが、木村錦花『興行師の世界』七十四頁以下にある以上の詳しい履歴を現在見ない。おそらく検討すれば種々問題があると思われるが、ここでは養父常五郎の代から歌舞伎興行の金主であったこと、明治二十二年十一月に歌舞伎座の初興行を行い、以後座主であったことのみを記す。ただし、特記

したいのは明治三十六年四月十三日の死後、養孫亀之助が各所へ合計千六百円の寄付を行っていることである。すなわち勝五郎の歌舞伎座引退後もずっと、千葉家には財産があった。守田勘弥のように資金難のため歌舞伎座を手放したとは考えられないのである。

初代社長となる皆川四郎は明治九年に東京で代言人免許を取得、十六年二月まで長野県警部長を務めたが、辞任して石巻三菱支店長、九州鉄道会社役員を歴任、二十三年九月に大日本東京電灯会社支配人となった。従来、渋沢栄一の義理の妹婿であることばかりが強調される。実際には妻同士の姉妹のようである。

しかし田村成義は十年に東京で代言人免許を取得している。東京で年間十五人前後しか合格者のいない時代であるから、皆川と田村は代言人時代から当然面識があったと思われる。しかも電灯会社は二十四年六月差し押さえにあうが、それを克服している。そうした以前からの面識と経営手腕によって勧誘されたと見ることができよう。

井上竹次郎が最初に「読売新聞」(以下「読売」)紙上に現れるのは、明治二十六年九月四日、後藤象二郎伯爵の妻の弟として、はじめ炭鉱株、次いで東京株式取引所の株を仲買を通さず直接扱う株商としてである。翌月、彼は取引所の移転問題に後藤派の一人として関わる。二十九年二月現在の身上調査では彼は「無職業」であるが、東京・神奈川の各地に煉瓦家屋や土地を持っている。後藤伯爵は芸人を多く雇員にした。特に尾上菊五郎は「常に伯の家に出入して、その眷顧を受け」た一人で、千歳座の引幕に揮毫をもらっている。大磯の別荘地を譲り受けもしている。そして菊五郎は田村と明治十年代から親交がある。以上から、井上が歌舞伎座に関係したのは後藤伯爵を通じてで、会社の経営よりもむしろ株式の扱いに経験があることを求められたのが裏づけられる。

三宅約三は、二十八年七月に後藤伯爵系の政党同志会の人員に名を見いだすことができる。同年九月には後藤の買入れた硝子製造所を「主幹」している。創業時の取締役会には入らなかったが、後藤に関連して会社に勧誘されたと見ることができよう。

千葉仁之助は、前述の株式申込簿に記載された住所が一番地違うことから見ても勝五郎の関係者であるのだが、実は皆川とも関連のある人物である。彼は渋沢栄一の従兄弟喜作の息子で、千葉の養子になったが後に離縁されたことが分かっている。

野田丈次郎は経歴その他不明であるが、「第壹号 歌舞伎座株式会社株式申込簿謄本」によれば八十株申し込んでいることから見て相当の資産家である。皆川辞任後の三十年一月、取締役を辞任した届が公文書の中にある。皆川に近い人物と推定される。

西川忠亮は印刷会社築地求林堂の店主であり、もと貿易商であった。監査役の馬越恭平は、明治二十九年には三井物産重役であると同時に大日本麦酒株

式会社社長であり、益田孝、渋沢栄一らと並ぶ大実業家である。早川松之助は二十二年から、後に井上が株を預けたとされる東海銀行の取締役であった。⁽³¹⁾坂本省三は元自由党员で、二十五年に分裂した東京代官新組合の副会長になった人物である。そして田村は元自由党员であり、二十五年当時この新組合の一員であった。⁽³²⁾

発起人・取締役に入っていない田村、福地、守田についても簡単に説明しておく。田村はもとと代官人であったが、守田勘弥との交渉から興行に関与するようになり、明治十八年十一月には千歳座で独立した興行を行っている。以後千歳座、歌舞伎座の経営に関与するようになっていた。二十八年には、二十五年から弁護士と名称の変わった代官人を廃業している。⁽³³⁾

福地はもう一人の歌舞伎座創業者である。新聞記者から政治家、小説家になり、演劇改良会に参加して以後は劇場の改良にも関心を持って活動していた。しかし二十三年五月金銭的な問題で退き、会社設立以前の肩書きは顧問であった。株主代理が井上であるという事は、井上となんらかの関連があったことを示している。

守田は幕末以来の守田座・新富座の太夫元であるが、明治二十年代になると借金のため、座主権を他人に譲り渡して興行を行っている。前述のように二十八年十二月には座主権をめぐる訴訟が起こされている。経営に出資して参加することには無理があった。後述する「都」の記事によれば四月興行から歌舞伎座に關与するのであるが、そのことを証明する公文書はない。

以上から、千葉勝五郎は歌舞伎座を負債のため譲渡したのではないと推定される。そして株式会社発起人・取締役・監査役となった人々は、引退した千葉勝五郎と、名前を公に出していない田村、福地、守田以外、ほとんどこの以前歌舞伎興行に關わりを持たなかった資産家・実業家であることが判明する。不明なところもあるが、田村と何らかの關わりのある人物が多い。そしてこの後対立する皆川と井上は、同じ外部から入った同士でもその出自・性質が明らかに違うことも分かる。

四 再検討―皆川社長辞任まで

明治二十九年七月三十日「都」掲載の「両座の未来」と題した記事は、守田と福地が井上に働きかけ、七月興行を会社外の興行として行ったことを報じている。七月興行の辻番付をここに掲出するが、【図版1】後に図版を載せる十一月興行のものと比べて、「会社」の文字はどこにも記されない。つまりこれは、あきらかに会社による興行ではない。翌一日と二日、「都」に歌舞伎座名で掲載された「為念広告」には「或る輩は不日閉場するなぞ無根の虚説」を流しているところある。しかしこの興行は三日に閉場する。これにより、井上と福地・守田が共同したことと会社内部に混乱が起きたことが外部に明らかになったのは、八月初頭以降と区切ることができる。

111-000-411



【図版1】 明治29年7月興行の辻番付

11371

『劇壇史』にいう「暴露記事」は、「時事新報」に該当する記事がない。しかし「都」八月二十二・二十三・二十六・二十七日に「歌舞伎座の内部紛争」と題した詳細な記事がある。内容を比較すると『劇壇史』の二十九年四月、七月の項に分散している記事は、この連載記事にほとんどをよっていることが明らかになる。『劇壇史』の出版誤記である。

ところで、「仮定款」には年間興行回数を六回と定める条文はない。明治三十一年四月二十二日改正の定款にも興行回数を定める条文はない。三十一年の定款は全四十三条で条数は「仮定款」と同じであり、この間の改正届などを見ながら比較しても、内容が根本的に違う条項・削除条項はない。つまり、年間興行回数の定義はもともと定款になかった可能性が高い。

従って「都」から『劇壇史』に引き継がれた、定款にある興行回数を改正するか否かで皆川と井上が対立したとする記事は誇張で、二者の対立は本来私的見解の相違として調整されるべき問題だったのであろう。しかし田村が皆川と、福地が井上とそれぞれ関係が深いことから、田村と福地・守田の対立が重なって、和解することなく会社経営全体に拡大し、外部にも公にされていったものと推定する。

こうした中で歌舞伎座株式会社株は、明治二十九年九月一日初上場された。先物取引は一株十四円、終値は十三円二十銭で、第一回払込の値を七十銭上回るスタートであったが、会社内部の混乱を危ぶんで割合に下値だったと評価されている。

九月初旬、すでに次興行は十一月までできないだろうという新聞記事が出ている。『新報』も株主総会後でなければ着手できないだろうと伝える。十月四日に総会が開かれたが、定数に満たず仮決議となったことは前にも記した。

『時事新報』十月十八日に、第一回上半期、四月八日から九月三十日までの決算報告が掲載されている。決算承認を四月と十月に行うことは「仮定款」四十一条にも定めてあるが、当時の一般的な会社の決算期は四月と十月で、歌舞伎座株式会社はその慣例に忠実に従っている。そしてこの報告の末尾に記された月日は十月十三日で、本決議はこの日行われたと推定することができる。取引銀行は安田銀行と第七十七国立銀行で、後者は設立に渋沢栄一が大きく関与し、宮城県を本拠としながら東京株式取引所で唯一、株式の精算・出納を行っていた銀行である。

この決算によれば株主配当金の総額は一株あたり七十五銭、繰越金は百三十八円七十九銭で、『劇壇史』の記述を裏づける。会社が内紛し、興行ができない状態であっても利益と配当を出していることが注目される。何らかの会計操作がなされているかと考えられるが実証資料がない。しかしここからは、配当を出そうという会社の意向が感じられる。

十月の株主総会で定款改正の定義がなされたのは第二十條・三十七條だと『新報』一六五四号は伝えるが、十月二十二日付皆川より東京府知事宛の「進達願」によれば第十二條と三十七條の誤りで、『劇壇史』の記述が正しい。それは

・毎事業年度最終ノ日ヨリ三十日以内株式移転ノ登記ヲ停止スルコトアルヘシ（第十二條）

・取締役中ヨリ主トシテ業務ヲ取扱フヘキ専務取締役一名ヲ互選スヘシ（第三十七條）

をそれぞれ、

・毎事業年度最終ノ翌日ヨリ三十日以内株式移転ノ登記ヲ停止スルコトアルヘシ
・取締役中ヨリ主トシテ業務ヲ取扱フヘキ専務取締役一名ヲ互選シ之ヲ社長ト称ス
其責任ハ他ノ取締役ト同一ナリ但業務ノ都合ニヨリ副社長一名ヲ置クコトヲ得
と変更することであった。変更前の条数・内容は「仮定款」の条数・内容と一致する。特に三十七條の変更（傍線は私に引いた）は、十月四日時点で、井上が皆川中心で会社を維持するのを拒否したためと考えられる。そして十三日にそれが承認された。

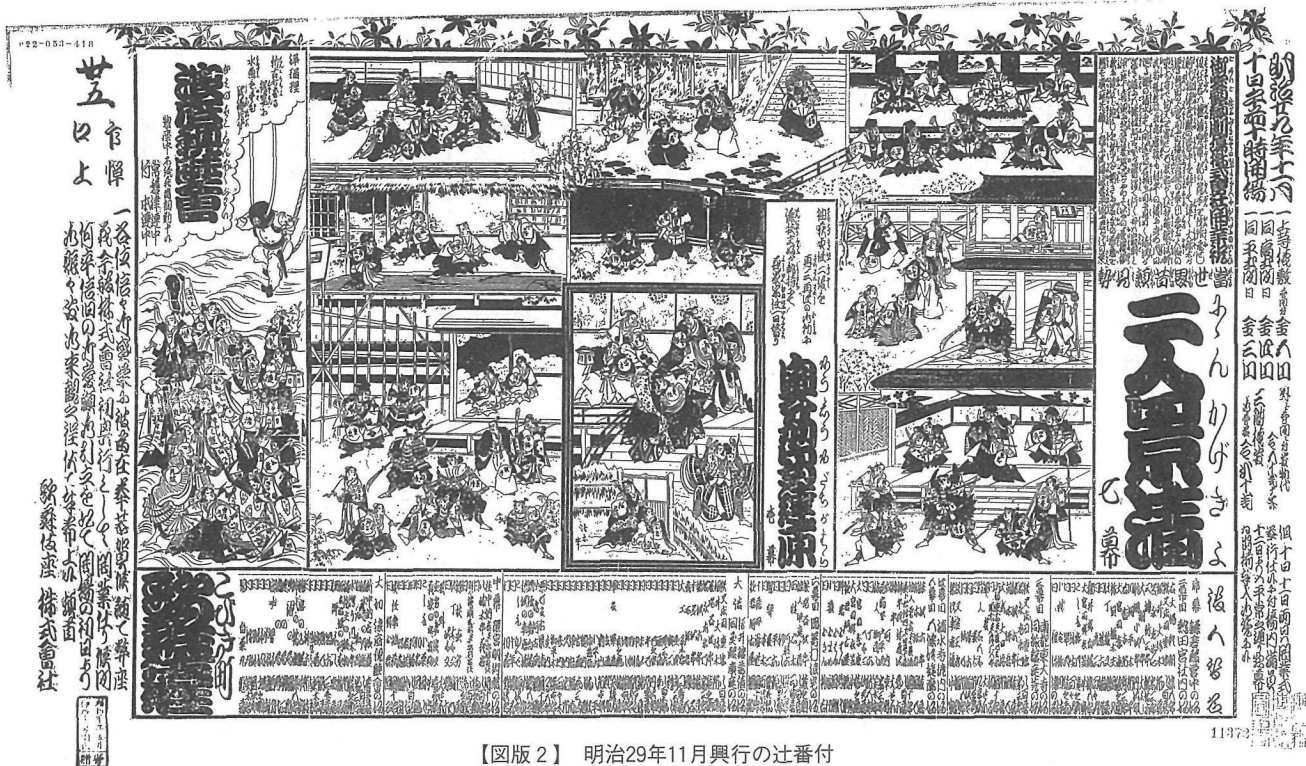
この総会で西川、千葉と交代して吉川安之助、伊藤謙吉が取締役となった。ここで完全に千葉家の関係者は歌舞伎座と関係を絶つ。吉川は経歴不明である。伊藤は三重出身の元衆議院議員で、その後いくつかの会社の取締役を勤めている。『新報』一六六一号は株式仲買商とする。この真偽が明らかでないが、歌舞伎興行界の外部から関与し、井上に近い立場であることを示すものと思われる。

開業式はこのような状態の中で十一月十日・十一日に行われた。この興行の辻番付を次頁に参考図として掲げるが、【図版2】左端の口上で「歌舞伎座株式会社」の初興行であることを明記している。一番目の「二人景清」は福地による「壇浦兜軍記」の改作で団十郎主演であるが、これは福地の座内における勢力が増していることを示すものであろう。

仕入金についての真偽を示す資料を現在見いだしていない。しかし以上の経過から、皆川社長は十月十三日時点ですでに実権を失っていたと推測される。

以後、明治二十九年十二月十一日付で専務取締役を皆川から伊藤に登記変更する届が農商務省大臣宛に提出され、翌三十年四月十七日に伊藤から井上への登記変更届が出る。以後、三十九年十一月大河内輝剛に会社を譲渡するまでの井上社長時代が始まる。明治三十年以降は、時に欠損が報告されることや社長への弾劾があっても、会社は維持され続けた。

井上と守田・福地、皆川と田村とのつながりをそれぞれ考え合わせれば、会社が以後存続しても会社経営の経験豊富な皆川が会社を去ったことは、より詳しく言うならば、歌舞伎座は外部の実業家・資産家を中心にした会社方式の導入に成功したが、よ



【図版2】 明治29年11月興行の辻番付

り利益を優先した合理的運営に進む道を、明治二十九年末の段階で選択しなかったということになるであろう。そして田村は、会社の設立に関与しながら、皆川との関連から、ともに歌舞伎座と関係を絶たざるを得なくなったと考えられる。

田村はこの後、「今昔物語」によれば大阪へ向かい、浪花座と角座を合併した道頓堀演劇会社に参加した。それが設立されたのは三十年六月十日であるが、発起人一同の中に田村の名はない。歌舞伎座と同様に取締役会には参加しなかったと推測される。

まとめ

以上から、歌舞伎座株式会社設立過程と興行史上の位置は次のようにまとめることができる。

この会社は歌舞伎座の興行で利益を得ることを目的として、明治二十九年二月申請され、四月認可された、近代的な株による株式会社である。千葉勝五郎の個人経営を、それまで主として歌舞伎の興行に関わりを持たなかった実業家・資産家が構成する取締役会経営に完全に切り替えたことが大きな特徴であった。しかし従来からの興行関係者を巻き込んだ内紛が起り、八月初頭からそれが外部にも明らかになった。十月の株主総会で会社の目的がひとまず達成されたことが報告されたが、すでにこの時点で皆川中心の体制は崩れていた。結果的に十一月末、皆川社長は辞任に追い込まれた。以後は、従来からの興行関係者たちにより親しい立場をとった井上が社長となって経営を継続した。

数百に及ぶ会社を設立した、日本最初の株式会社設立者でもある渋沢栄一が、明治四十四年三月開場する帝国劇場に深く関わったことはよく知られる。もし彼自身、義弟の皆川が専務取締役をつとめる歌舞伎座株式会社に直接関与したならば、あるいは歌舞伎座は、帝国劇場のように上演時間も短く演目のバラエティも考慮した経営へと傾斜していっただろう。帝国劇場の劇場構造と演目の編成方法は以後の歌舞伎の本質的な面にさまざまな影響を与えたが、それがもっと早く歌舞伎座から起きていた可能性も考えうる。

しかし取引銀行の頭取や、二十九年十月に行われた慈善会の会長として渋沢の名を見ることはあるが、結果的に歌舞伎座株式会社の経営に渋沢の関与を見ることはこれ以前になく、以後もない。それはすでに秋庭太郎が『日本新劇史』で指摘しているように、明治二十一年ごろ演劇改良会で新劇場を設立しようとした際に起きた福地との行き違いに起因するものと考えられる。そして劇場外部の人間が多く参加した株式会社経営は一応成功したが、会社組織の経営に井上よりも経験が豊富だった皆川社長は辞任した。以後も歌舞伎座の興行編成や上演時間、場内設備などに、旧来の歌舞伎興行の方法から大きく変更される点は、この後明治四十年一月、社長が大河内に交代し

て第一回の興行まで現れてこない。

だが、会社を設立する主目的が負債の返済ではなかったこと、劇界外部の実業家・資産家を積極的に経営陣に取り込んだこと、そして公開・上場した近代的な株式の売買による収入を資本金として、かなり危うい状態ながらひとまず決算が整合する経営を行ったこと、一般の会社と同様の株主総会を開いて報告を行い、配当を出したこと、さらにその経営が以後長く継続されたことは、明治十年代の新富座株式会社より、長期的に維持しうる会社方式へ一歩前進したものと評価できるであろう。

歌舞伎座株式会社の具体的な設立過程と組織を検討することにより、歌舞伎興行史上で、大劇場の経営が一般的な株式会社と同様の経営方式で試みられつつ長期に継続するようになってゆく過程が、現在知られているよりもさらにはつきり見えてくると考える。以上を結論とする。

調査にあたり資料閲覧を許可された東京都公文書館、早稲田大学演劇博物館、東京文化財研究所、資料所在についてご助言を受けた佐藤かつら氏、児玉竜一氏に感謝申し上げる。また本稿は、日本学術振興会の平成十五年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

注(1) 詳細は拙稿「新富座の株式会社化——演劇博物館所蔵資料の紹介を含む——」(「早稲田大学大学院文学研究科紀要」第四八輯第三分冊・二〇〇三年)。

(2) 昭和八年・早稲田大学出版部。

(3) 「新演芸」大正五年三月号から連載、全二十回。今回は特に第三回・四回(同誌七月・八月号)を対象とする。

(4) 大正十一年・市村座。

(5) 昭和十一年・中央公論社。

(6) 「歌舞伎新報」一六二六号は枚数に十二人しかいない日があるとする。しかし伊原敏郎「歌舞伎年表」第七巻(昭和三十七年・岩波書店 五〇八頁の「各座月制興行日数及び看客数」によれば、興行日数が十六日と短いことが目につくが、一日平均の木戸の観客数で比較すると、五月は団十郎らの出勤した二月よりやや少なく、七月は五月の約二割減である。

(7) 「新報」一六一九号。

(8) 一六一五・一六一八号。明治二十八年八月二十五日・九月二十三日発行。

(9) 戸板康二「演芸画報・人物誌」(昭和四十五年・青蛙房) 九十三頁などに言及。

(10) 「新報」一六二七号。

(11) これらの文書は、他の会社の関係文書とともにいくつかの綴りに綴じ込まれている。閲覧はマイクロフィルムによる。文書数が数十にわたるため、綴りの書名と請求番号を挙げる。

号を挙げる。

・明治二十九年第一種共三十八冊ノ三十三 第三課文書類別 農商 会社 十二
自四十至四一 (621.D2.17)

・明治二十九年第一種共三十八冊ノ三十六 第三課文書類別 農商 会社 十五
自百二十至二〇〇 (621.D3.3)

・明治二十九年第一種共三十八冊ノ三十七 第三課文書類別 農商 会社 十六
自二〇一乃至三〇七 (621.D3.4)

・明治三十年第一種共六十三冊ノ四十七 第六課文書類別 農商 会社二関スル書類 二十一 自八九至一一九 (621.D3.3)

・明治三十年第一種共六十三冊ノ五十 第六課文書類別 農商 会社二関スル書類 二十四 (番号朱字のため不明) (621.D3.6)

・明治卅一年 文書類纂 第二種 農工商 普通会社 第九 (623.A2.9)
文書はさらに細分類されているようで、閲覧には他にマイクロ番号が必要である。

現在のところ、係の方に相談しながらデータベース検索を依頼することで閲覧可能な状態である。

(12) 二月二日。

(13) 「新報」一六二七号は引き渡し金額を五万五千円とする。『年代記』の直接の根拠はこの記事であろう。

(14) 明治二十九年三月六日付「第伍阡陌陸拾玖号 座主権譲渡契約証書謄本」による。以下参照している会社設立関係の公文書類は、すべて注(11)に記す簿冊に含まれた東京都公文書館蔵の資料である。

(15) 「読売」五月十九日。

(16) 「都」五月六日「歌舞伎座一見評」。

(17) 「仮定款」第十三条・十四条。

(18) 昭和三十一年・青蛙房。

(19) 「読売」明治三十六年六月二十五日。

(20) 「読売」明治十六年二月六日、二十三年九月十六日。

(21) 奥平昌洪「日本弁護士史」(「代言人免許年度一覧」(大正三年・巖南堂書店)。

(22) 「読売」明治二十四年六月二十四日。

(23) 「読売」十月二十四日。

(24) 芝区が内務部長東京府書記官宛に提出した身上調査書「庶第百三十八号」による。

(25) 大町桂月「伯爵後藤象二郎」(「桂月全集」第七巻、大正十五年・桂月全集刊行会)。

(26) 「読売」明治二十三年八月十七日。

(27) 詳しくは拙稿「田村成義と横浜」(「早稲田大学大学院文学研究科紀要」第四四輯第三分冊・一九九九年)を参照されたい。

(28) 「読売」七月四日、九月十四日。

(29) 田村成義「無線電話」(「鈴木幸平」(昭和五十年・青蛙房)。

- (30) 「読売」明治四十五年七月十五日。
- (31) 『日本現今人名辞典』（明治三十三年）、『明治人名辞典Ⅱ 上巻』（一九八八年・日本図書センター）の復刻による。
- (32) 注（27）および「読売」明治二十五年五月二日、安達元之助『東京弁護士会史』（昭和十年・東京弁護士会事務所）。
- (33) 注（31）に同じ。
- (34) 「歌舞伎座興行契約証」（早稲田大学演劇博物館蔵 博物資料22236）による。
- (35) 「両座」は歌舞伎座と明治座をさす。
- (36) ただ、後藤伯爵が団十郎・菊五郎に会社の状態を尋ねた話はこの記事にない。現在原拠不明。
- (37) 「都」九月二日。
- (38) 「都」九月八日、「新報」一六五四号。
- (39) 現在の七十七銀行。以下は『七十七銀行120年史』（一九九九年・七十七銀行）による。
- (40) 注（31）に同じ。
- (41) 『近代歌舞伎年表 大阪編』第三卷（昭和六十三年・八木書店）二百六十五頁。
- (42) これについては、以前拙稿「帝国劇場で演じられた劇」（『よみがえる帝国劇場展』所収、平成十四年・早稲田大学演劇博物館）に試論した。
- (43) 昭和四十六年再版・理想社。百七十四頁以下。